

平成 2 9 年度中学入試

[後期入試]

国語科 問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて 1 2 ページあります。

試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を上げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[後期入試] 受験番号 _____

金蘭千里中学校

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

目が見える人と見えない人の空間把握の違ひは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのはアイガイかもしれませぬ。けれども、見える人と見えない人とは、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。これは(注1)難波さんが指摘した例です。見えない人にとって富士山は、「上がちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしてはいるわけですが、見える人はたいいそのようにとらえてはいはずです。

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がりに」です。つまり「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けたA形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆のような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないのでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きのあるもの」を「平面イメージ」に変換してしまう。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大なものを見るとときには、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄っぺらいわけではないことを私たちは知っています。X視覚がとらえる二次元的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向があるので、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供する文化的なイメージによってさらに補強されていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描いてみれば分かります。木星と言われると、多くの人は横縞の入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様の効果もあります。木星はかなり二次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役買ってはいそうですが、なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子供のころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵や絵画の中で、私たちがさまざまに「まああるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色の夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにはふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的に醸成された月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、(注2)デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月も縁起物です。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」

のイメージはますます強化されています。

見えない人、とくに**センテ**ン的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがありません。見える人が物を見るときにのおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

Y、見えない人は、見える人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになりません。見える人は三次元のものに二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、**ゲンミツ**な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができないのではないか。

なぜそう思えるかというと、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにながらにして獲得します。顕微鏡**ボウエン**鏡写真も含めれば、**B**眼では見ることのできない視点到立つことすらできます。想像の中でその場所に立つようした場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも**上座**から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対で、はたまたノミの視点で床から見たり、ハエの視点で**天井**から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはずです。けれども、私たちが体を持つていかぎり、一度に**エクスウ**の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、**☆**ことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。一方、見えない人は、物事のあり方を「自分にとってどう見えるか」ではなく「諸部分の関係が客観的にどうなっているか」によって把握しようとする。この客観性こそ、見えない人特有の三次元的な理解を可能にしているものでしょう。

決定的なのは、やはり「視点がないこと」です。視点に縛られないからこそ自分の立っている位置を離れて土地を（注3）俯瞰することができたり、月を実際にそうであるとおりに**C**形の天体として思い浮かべたりできたわけです。

もちろん、情報量という点では見えない人は限られているわけですが、だからこそ、踊らされない生き方を体験できることをメリットと考えることもできます。

（伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』一部改めたところがある）

(注1) 難波さん：三十九歳の時にバイク事故で失明し、全盲になった人。

(注2) デフォルメ：変形すること。いびつにすること。

(注3) 俯瞰：高い所から見おろすこと。

(一) 波線部 a、e のカタカナを漢字に直しなさい。

a イガイ b センテン c ゲンミツ d ボウエン e フクスウ

(二) A(二字)・B(一字)・C(本文中の言葉で一字)に入る適切なことばを、それぞれ与えられた条件に従って答えなさい。

(三) X・Yに入る適切なことばを、それぞれ次のア、カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けれども イ ところで ウ たとえば エ たしかに オ つまり カ いっぽう

(四) 二重傍線部 I 「縁起物」・II 「上座」の意味としてもっとも適切なものを、それぞれ次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

I 「縁起物」 ア 多くの人にとって縁の深い物 イ 良い事があるようにと祝い、祈るための物

ウ 風流で観賞の対象となっている物 エ 信仰の対象としておそれ敬われている物

オ 様々な創作物と結びつく題材となる物

II 「上座」 ア 部屋の天井にあたる場所 イ 礼儀正しい座り方 ウ 地位の高い人が座る席

エ 高級料亭のお座敷 オ 年配の人専用の座布団

(五) 目の見える人にとって、富士山や月のイメージが二次元的であるのはなぜか、六十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(六) 傍線部「そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか」とあるが、そう言えるのはなぜか、傍線部以降の内容から、五十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(七) ☆に入るもっとも適切なことばを、次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見ている空間が、自分がいる場所から眺めることによって客観的になっている

イ 見ている空間が、他の視点から見た空間と同じく、かなり平面的で情報量が多い

ウ 見ている空間が、実際にそうであるとおりに三次元的にとらえられた空間とは異なっている

エ 見ている空間が、過去に見たイメージと、非現実的な想像の中での視点に基づいて構成されている

オ 見ている空間が、いくつかの視点から同時に見た空間と比べれば、客観性に欠けており、信用できない

(八) 本文の内容に合うものとしてもつとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目の見える人は、風呂屋の絵の影響で富士山のイメージを「八の字」に思い描き、実際に厚みのない山であると誤解している。

イ 目の見える人が木星を三次元的にとらえられているのは、月と違って縞模様が入っており、天体写真の色のイメージが茶色だからである。

ウ 目の見えない人は、二次元的な視覚情報ではなく文化的なフィルターを通して物を理解するため、対象を三次元的にとらえることができる。

エ 目の見える人は、自身の眼で見た空間だけではなく、絵や写真を見るときは、画家やカメラの視点から見える空間をもとらえることができる。

オ 目の見えない人はノミの視点にもハエの視点にもなれるため、いくつもの視点を自由に切り替えることができ、自分の視点から解放されている。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高校一年生の「私」には中学時代からの友人「綾美」がいるが、「綾美」は中学時代のいじめが原因で現在学校に通えないでいる。そのいじめに心ならずも加わってしまった「私」は、罪悪感から毎日「綾美」の様子を見に行っている。先日、「うた部」に所属する「古畑清ら」さんの強引な勧誘をうけ、「私」は「うた部」に入部することになった。

井筒駅で電車を降り、**aトホ**で学校へ向かう。歩きながらずっと、綾美のことばかり考えてしまう。部屋へは行ったけど、昨日もまた綾美に言えなかった。うた部へ入部することに決めたと。月曜と木曜は行けないことだけ、なんとか伝えた。

綾美の部屋は、行きたびに散らかり方がひどくなっていく気がした。引きこもってるから仕方ない部分はあるけど、①綾美の心と呼応しているようで心配になる。あれほど自慢だった渦銀河系のポスターがはがされ、誕生日に私がプレゼントした星座の写真集も、どこかへ片付けられていた。

お母さんが借りてきたというDVDがあった。綾美には、外出する意志がないみたい。うまく言えないけど、危険な気がした。もう学校へ行かなくていい、と思っっているのだろうか。

綾美が好きだった国語は、随筆が終わって、川上弘美という作家の小説に入った。現代文の教科書を、綾美はもう最後まで

で読んでいた。国語はいいとしても、ほかの教科はどうするつもりなんだろう。生物は教科書がぶ厚いせいもあって、ものすごく進むのが速い。『細胞』が終わって、来週からは『タンパク質』だ。数学は最初に習う、因数分解のところ。中学の復習もあつたから、まだ今からでも授業に追いつける。

「②綾美なら、まだ休んでても大丈夫だよ」

私の言い方がよくなかったのかもしれない。綾美の表情がきつくなった。

「大丈夫って、何が」

「いや、先生が、二次関数で迷子になりやすいから、みんなで乗り切ろうなって……」

本当は、それまでに学校へ来られるようになればいいねって、言いたかったのに。あんな表情、今まで見たことなかった。少し怖くなって、私は、綾美の気分がよくなるようなことを考えた。そうだ、学校で実践しているあのことを……

「私、高校三年間、ずっと友達を作らないでおくから」

少しは喜ぶかと思つたのに、綾美はうつむくと、「当然だよ」とひとこと返しただけで、DVDの新着情報をうつろに眺め続けるだけだった。

昨日までなんとも思つていなかったのに、気づくと、放課後が待ち遠しくなつていた。廊下を歩くと、bイシキしていないつもりでも、すぐうた部のプレートが目につく。そして、③てつきり蛾だと思つたのが、蝶に見えてくるから不思議だ。部屋へ入るとまだ、いと先輩だけだった。

「わーっ、よく来てくれたねえ」

私を見ると、cムネの前で小さく手を叩いて、駆け寄ってきた。髪からふわつといい匂いがする。

「座る場所は決まってるから、どこでもいいよ。逆にいつも同じ場所に座っていると、同じ風景しか見えてこないから、イシキして変わった方がいい。いつでも心が動くようにしておかないと」

「蛙がハエを捕らえる感じですか」

「あ、いいな。そのdバツソウ」

久しぶりに誰かにほめられて、心があたたかくなる感じを思い出した。

全員が揃うと、先生がホワイトボードの前に立ち、私が正式に入部したと告げた。

「せっかく一年生が入つたので、もう一度、短歌を作る上で大事なことを、確認しておきたい。特に、古畑清ら」

「なんでやねーん」

あごひじついて、清らさんがぼやく。

「まずこれ」

言つて先生は、マーカーで、ホワイトボードへ書く。

『④人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける』

「これは（注1）紀貫之の、（注2）古今和歌集仮名序からの抜粋だが、清ら、どういう意味だ？」

「えーっと、人の心の、なんかずーっと奥に、種？ 根源？ 根幹？ なんかそんなのがあって、それが言葉になるってこと」

「おまえが言うのと嘘っぽいけど、まあ、合ってる。ただし、心といつても、⑤ただ、じーっと、ぼーっと空を見ていてもダメだから。歌に詠む素材は、自分から求めていかなければならない。そして歌は、雑談や世間話に、語呂合わせしたものでないからな。⑥日々の生活の中で感じる、喜怒哀楽の、その瞬間、そのままを切り取る。そこに言葉の命がある。その命に、どれだけ葉を繁らせどういう花を咲かせるか、それはみんなが種である心をどう育てるかにかかってくる。何か質問はあるかな」

どう見ても、これは私への特別授業のようなもの。きちんと話を受けとめなきゃ。

「先生」

「おっ、なんだ白石」

「今、その瞬間、そのままを切り取るって言いましたけど。あとで直すのはいいのですか。この前、清らさんの歌を、いと先輩が直したりしてましたけど」

「⑦いい」

先生はあっさり答えた。

「理由はふたつある。ひとつは、日常の生活の中で、心が揺れた瞬間を切り取るといつても、誰かに届かないという意味がない。届くってことは、共鳴、共感し合うってことだな。そこで初めて歌として成立する。でなきゃ、独り言だ。そのためにも、どうすれば、一番伝えたいことを一番効果的に伝えられるかを考える」

先生は65↓80とホワイトボードに書く。

「前回六十五点だった英語のテストが、八十点になった。そんなとき何を一番伝えたいか。八十点を取ったことか？ 違ふよな。十五点アップしたこと？ もちろん事実はそうなんだけど、自分が頑張ったってことだろ、一番伝えたいのは。親にテスト見せて、へえ、頑張ったねって言ってもらって、初めて思いを共有できる」

「もうひとつの理由というのはなんですか？」
いと先輩が聞く。

「それはせっかく、こういう場があるのだから、みんな活かそうよって話。詠み合うだけじゃつまんない。これから先、（注3）就活なんかで、自分の、何をどうアピールすれば、相手の心を揺さぶることができるか。役立つと思うよ」

そして先生は私をまっすぐに見て言った。

「短歌には心の瞬発力と柔軟性、そのどちらにも必要だからな」

(中略) ——部活を終えた「私」は清らさんに誘われて、お好み焼き屋を営んでいる清らさんの家に行くことになる——

しばらくすると、カップに入ったお好み焼きが運ばれてきた。お好み焼きを自分で焼くの、初めてだったからドキドキした。清らさんが鉄板の下の火を「チヨウウセツ」する。ジュワーツと鉄板の上に流し、軽く形を整える。キャベツに熱が通りはじめると、お好み焼き独特の甘い匂いが嗅覚を刺激する。

「慌てたらアカンで。それと今日はおごるけど、また友達連れて食べに来てや」

「えっ……ああ……」

「なんやその返事。もしかして、ほんまに友達おらんのか？ なんで？」

どうしよう。店内のいい匂いのせいだろう。正直に打ち明けたがってる自分がいて困った。お好み焼きの表面が色づいて、香ばしい香りが漂ってきた。焼きあがって、青海苔とカツオを振って切り分ける。断面から肉がこぼれおちる。結構ボリュームがありそう。視覚と嗅覚でおいしいぞ情報が全身に行きわたる。

「うた部で何かあったら、あたしに言うたらいいからな。部長は口うるさいし、先生はちよつと冷たいところあるし」

清らさんがソースをほっぺにつけながら言う。

「確かに難波江先生って、ときどき哀れむような眼で見てますよね」

「せやろ。あの目つきすごく微妙やろ。微笑みながらふつと目の色が変わる」

「もしかして、別れた彼女は、あの目が嫌だったのかも」

「なるほどなあ。いいところなあ」

「百パーセント信用しきれない。どこかでふつと、身をかかれそうに不安を感じてたのかも」

「すごいな。桃子って、ぼーっとした娘やと思ってたけど、結構観察眼鋭いな」

そりや、中学の時目いっぱい苦労しましたから。思わず言いそうになった。いったいなんのために、あれほど気をつかいながら毎日を送ったのだろうか。自分の心が、壊されないようにするためか。すべてのクラスメイトの、盛りあがる話や触れてはいけない話。誕生日や血液型はもちろん、最新の情報や、いつでも笑いとれる自虐ネタをインプットしておかなくてはならなかった。⑧ そうまでしても、結局私は友達一人守れなかった。守るところか傷つけてしまったのだ。

帰り際、清らさんが言った。

「あのさあ、よけいなお世話かもしれんけど、ひとりぼっちになったらアカンで。一人はいいけど、ひとりぼっちはアカン。」

人間が生きながら腐くまってまう」

清らさんの笑顔に、本心を打ち明けられない申し訳わけなさが募つった。

「ありがとうございます」

「お母ちゃんやないけど、アンタ、ほんまにええ娘こやな」

「そんなことないです。最低です」

「えっ？」

「いや、なんでもないです」

慌わてて自転車に飛び乗り、ペダルをこぎ出す。とたんに、ガシャンと音がしてつんのめった。

「きゃっ！」

清らさんが支えてくれて、転まげずにすんだ。鍵かぎをかけたままの自転車に乗ろうとしていたのだ。

「ほんま天然やな。家まで氣きいつけて帰りや」

清らさんの視線を動力に変えながら、私はペダルをこいだ。

(村上しいこ『うたうとは小さないのちひろいあげ』一部改めたところがある)

(注1) 紀貫之……平安時代の歌人。

(注2) 『古今和歌集仮名序』……平安時代の和歌集である「古今和歌集」に付けられた序文。

(注3) 就活……就職活動の略。

(一) 波線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

a トホ b イシキ c ムネ d ハツソウ e チョウセツ

(二) 波線部①「綾美の心と呼応しているようで心配になる」とあるが、ここで「私」が心配しているのはどのようなことか。次のア～エの中からもっとも適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 綾美の部屋がこんなにひどく散らかっているようでは、とても家では勉強べんきやうできないのではないかということ。

イ 誕生日にせっかく「私」がプレゼントした星座の写真集も、実は綾美は喜んでいなかったのではないかということ。

ウ 「私」が月曜と木曜は綾美の家に行けないことで、綾美がますます孤こ独どくになってしまっているのではないかということ。

エ 部屋の散らかり方がひどくなるのに比例して、綾美の心もどんどん荒あれてしまっているのではないかということ。

(三) 波線部②「綾美なら、まだ休んでも大丈夫だよ」という発言に込こめられた思いを次のように説明した。

(1) (2) には本文からふさわしい表現を抜き出し、(3) には自分で考えた適切な語をそれぞれ指定

された文字数で記しなさい。(句読点を含む)

生物と違ちがって数学は進むのが遅く(1 十五字以内)ので、二次関数の授業に入るまでに

(2 十五字以内)と、綾美を(3 二字)させたかった。

(四) 傍線部③「てっきり蛾だと思ったのが、蝶に見えてくるから不思議だ」とあるが、これはどういうことが理由と考えられるか。次のア、エの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア うた部への期待

イ 綾美に対する罪悪感

ウ 不可思議な絵の魅力

エ 部活に参加する緊張感

(五) 傍線部④「人の心を種として」とあるが、後に出てくる英語のテストが六十五点から八十点になった場合に置き換えると、「種」に当たることは何か。十字程度で抜き出しなさい。(句読点を含む)

(六) 傍線部⑤「ただ、じーっと、ぼーっと空を見ていてもダメだから。歌に詠む素材は、自分から求めていかなければならない」とあるが、これと同じことをいと先輩も言っている。その一文をいと先輩の発言から見つけて、文頭の五字で抜き出しなさい。

(七) 傍線部⑥「日々の生活の中で感じる、喜怒哀楽の、その瞬間、そのままを切り取る」のに必要なことを表した五字の表現を、先生の発言の中から見つけて抜き出しなさい。

(八) 傍線部⑦「「いい」先生はあっさり答えた」とあるが、先生はなぜ「いい」と答えたのか。その理由を六十字以内で答えなさい。(句読点を含む)

(九) 傍線部⑧「そうまでしても、結局私は友達一人守れなかった。守るところか傷つけてしまったのだ」と中学時代のことが語られているが、この過去を踏まえて今の「私」の心情を次のように説明した。空欄にふさわしい表現を文中から指定された文字数で抜き出しなさい。(句読点を含む)

中学時代に綾美を傷つけた罪滅つみほろぼしに、「私」は高校へ入学しても学校生活を楽しまないのでおこうと決心し、(1 十九字)ことを実行している。そんな「私」が(2 十字)を綾美に言えないのは、部活をすれば学校生活を楽しんでいることになり、自分のせいで学校へ来られない綾美に申し訳ないと考えたからである。そんな「私」を心配してくれるうた部の先輩・清らさんにも(3 十一字)うしろめたさから、「私」は自分を(4 二字)だと思っている。

【問題は以上で終わりです】

解答

①〔60点〕

(一) a 意外 b 先天 c 厳密 d 望遠 e 複数

(二) A 三角 B 肉 C 球

(三) X ア Y オ

(四) I イ II ウ

(五) 視覚には対象を平面イメージに変換する傾向があり、

こうした平面性が文化的に醸成されたイメージによってさらに補強されるから。(60字)

(六) 目の見えない人は、見える人と違って視点に縛られないため、

対象を客観的に把握することが可能だから。(48字)

(七) ウ

(八) エ

②〔60点〕

(一) a 徒歩 b 意識 c 胸 d 発想 e 調節

(二) エ

(三) 1 まだ今からでも授業に追いつける(十五字)

3 安心(二字)

(四) ア

(五) 自分が頑張ったってこと(十一字)

(六) 逆にいつも

(七) 心の瞬発力

(八) どうすれば一番伝えたいことを一番効果的に伝えられるかを考えるようになり、

うた部はそれをみんなで活かす場でもあるから。(五十八字)

(九) 1 高校三年間、ずっと友達を作らないでおく(十九字) 2 うた部に入部すること(十字)

3 本心を打ち明けられない(十一字) 4 最低(二字)

③ × 4

⑩

④

④

④

④

③ × 3

③

② × 5

⑥

⑤

⑩

⑩

② × 2

③ × 2

③ × 3

② × 5